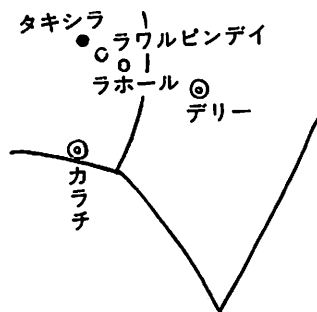


バマラの山寺に

「末法」の意識を思う

高 橋 堯 昭



パキスタンの主都イスラマバード（ラワルペンディ）から三四十キロの所に仏都タキシラがある。タキシラという町はアレキサンダー大王のインド侵入以来ギリシャ文化の栄えた所で、特にこの町の中心にギリシャ人の町シルカッブがあって、東西文化交流の跡が残されている。いわばこの町は東西文化の坩堝であった。そしてこのような広い社会的環境から、より広いより普遍的な大乘仏教が成立したといえる。勿も小乗仏教が最初に栄え、且つ大乘仏教が出てからも小乗仏教は依然として大きな力を持ち続けるのであるが。

このシルカッブを中心に約一、五キロの半径内に無数の寺が作られた。その寺々は塔院と僧院とが、小乗仏教の律に則ってはつきり分けられているから、これらの寺は創建時は小乗に属していたことが分る。

又これらの寺の主塔や奉獻塔、はた又僧院の壁には無数の仏像が現在も安置されていたり、又安置された跡があつて、かつての仏教の隆盛を如実に物語っている。

この町の中心から約十六キロの所に、これら都市の寺とコントラストをなす山寺バマラの寺がある。私は今回は特にここを尋ねることとした。

車を走らせて北の方向に進むと、途中大規模な灌漑ダムを作っている。雨の少ないこの下流地方の沙漠的な土地をみどりの沃地に変えようとする為の大工事。やがて何年か後、この HARO 川がせきとめられ、今から行くバマラの塔の下までが一大湖水となることだろう。

途中とある村で車を捨てて。カスバのような回数圏特有の村。高い壁にかこまれた家々の中からあどけない子供達がとび出して来る。この村の迷路のような道を抜けて行く。村の中を巾一米位の疎水が流れていて、まわりにはマンガーの大木、オレンジや麦の畑があって、これがそのまま湖底に沈むのかと思うと、いささか感傷的になる。このささやかな平和の村が湖底に沈むとこの人達の生活は、どうなるのであろうか。大きな幸福の為には犠牲は仕方がないのであろうか。

私はこの遺跡の塔を見学する為に、特にタキシラ博物館の好意によりこの遺跡の発掘に従事した博物館の役人を借りて来た。普通のガイドではとうてい行けないからだ。彼は得意になって先頭に立って行く。道などない。唯畑の畦道のような所を、道がなくなれば平気で畑の中を行く。この部落から直線にして六・七キロ、曲りくねっているから歩く距離はゆうに倍はあるだろう。丁度身延辺の富士川位の川巾をもつハロ川の岸の崖の上を行く。もうここへ来ると道らしい道はない。唯羊やラクダが歩いて踏みかためたケモノ道。然も上ったり下ったり、時には五六十米もの目もくらむような崖の上を、立木の枝にしがみつきながら伝い行く。まさに決死行。私はカメラをぶらさげて行くだけなのに、何度も何度も休みを要求し、水筒の水をガブ飲みする。現地の人には足が強い、この役人のようにすすいと

×印の丘の上が寺



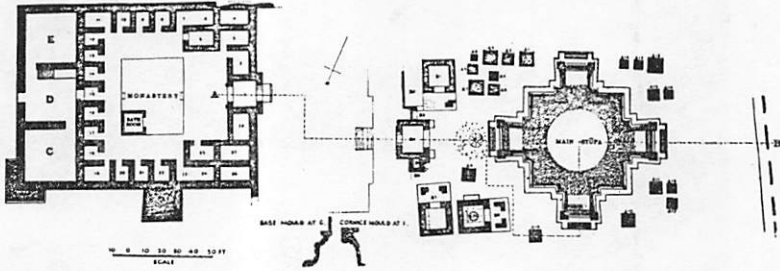
足早やに歩かれるのではたまったものではない。私の後からは何日か一緒に遺跡を歩いた運転手がフーフーいう私をかばうようについて来てくれる。

やがて川が左へカーブして、遙か彼方、川上の山の上に塔らしいものが見えて来る。「まだあんなにあるのか、この状態ではとても歩けない。いつそのこと止めて了おうか」と思うこと再三。でもここまで来てギブ・アップしてはと齒をくいしばって頑張る。特に今回は旅に病んで、その病み上りだからよけいにこたえる。時たますれ違う現地人、いかつい体格にも拘らず、どの人どの人も「サマアレイクム」と、笑顔をもって親しみの挨拶をして通って行く。きつとこんな道なき道を何里も何十里も彼方から町へ交易に行くから人恋しいのだろうか。

やつとこのことでバマラの塔や僧院の跡につく。ここは三方川にかこまれた恰も城のような所。遠く川下の方が一望にのぞまれ背後には高い山が崖々と聳え立っている。この山を越

復原全景

BHAMALA



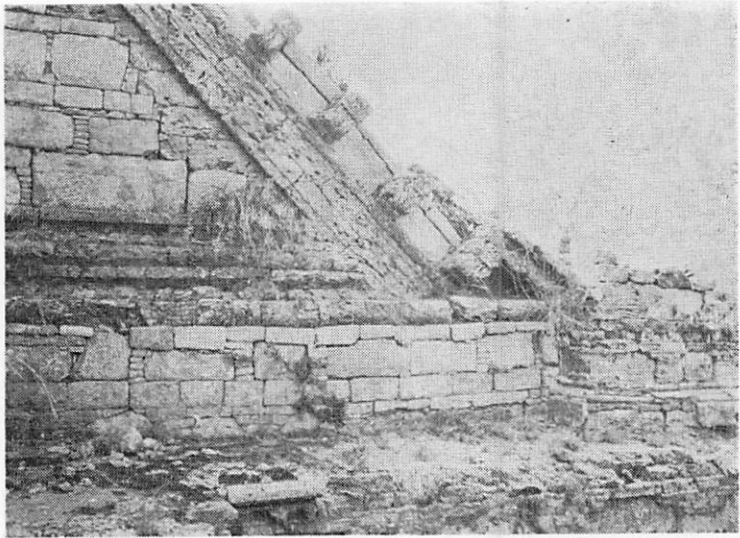
えればカシミールに通ずるのである。

寺は東西一五〇メートル南北七十米余の細長い山上の平地にある。中央に中心塔の小山のようなかたまり。そのまわりに奉獻塔やチャベル（祠堂）のグループがあり、塔の東はタキシラ等で見られる僧院が存在する。即ち各辺に小さな部屋をもつ矩形の僧院が。又ストゥーパの西にも他の遺跡がある。これは第二期の僧院に属していた所だが、然しこの所のテラス（広場）は洪水にけずられて細り、今は唯石の露出した小山にすぎ



くずれた十字形の塔

塔の側壁の石積が年代が下る毎に積み方が雑になった。あとの写真と対比されたい。



ない。

(イ) 主塔

主塔は未だ約十米の高さをもち約二十米四方だが、特に興味あるのはこの塔が十字形になっていることである。即ち階段が各七米ほど塔よりはり出し、然も四方から基壇の上のにぼっていて丁度上から見ると四方につき出したジャバラのよ
うな十字形に見える。この階段の入口両側に小さな動物のスト
ットツコ。東と西にはライオン、北と南には象がガードマン
よろしく立っている。この階段は基壇の上、ラムのまわりを
繞道する為と同時に、塔の威厳をまそうと特殊な形が考えら
れたのであろう。

この塔の中心部の石積みは四、五世紀頃この地方で流行した石の積み方で、専門的には *Semiashlar masoviy* というものであった。これは大きな石と石との間を、細長い小さな石とネン土で整然とうめて作る石の積み方で、比較的後期のものとされている。然も石の素質がやわらかいリムストーン

(ダルマラージカの塔)
AD2世紀造塔が盛んだった頃の積み方



を使ってあるので容易に彫刻がほどこされ得た。だから塔のまわりには沢山のパネルが作られ、このパネルとパネルはギリシャ風の柱でしきられていた。然しこのギリシャ風の柱も時代の推移を示して、美しいギリシャ建築の影響が、退化して粗末な不格好なコリント式に変わっている。パネルのいくつかはとれて了っているが、少しは、禅定等の単一仏や三尊仏のグループ、或は涅槃像のシーンが散見されるだけである。

塔の基壇の上には円形のドラムがあったことは前述したが、このドラムの上にドームそして天蓋があった。特にドラムが彫刻で飾られたことは基壇の最上段の土や灰の中にストゥッコのレリーフの断片が発見されたことから分る。だからこの塔は基壇だけではなく、円形のドラムにまでぎっしりと仏像がはめこまれていたことであろう。否メインストゥーパーだけでなく奉献塔や僧院にも無数の仏像が彫られていた。然し現在にはジャウリアン (Jaulian) やモラモラドゥ (mora moradu) の如く頭をとられた仏像の多いのが残念である。

残念といえば期待して行った涅槃像がなかったことであ

る。マーシャルは報告書に南の階段の東側に「寝釈迦」があり、仏陀の後に四人の弟子（足の所は女性）が天を仰いで泣き地に慟哭する状態の姿があったと記していたが、私はあっちこっち注意して探したが、くずれた塔の土に埋ったのか、博物館に持ち去られたのか遂に発見出来なかった。もしなくなっているとしたら、マーシャルの発掘以来ほんの三・四十年にこれらが消滅して了ったとはまさに諸行無常。

マーシャルによればレリックチャンバー即ち仏舎利等を安置した所は低い基礎にはなくドームの上の高い所に作られたらしいが、例によって例の如く宝探しにドームの中心は深く堀られて了って何もなかったという。

又この塔から出土したコインは地表から三〜四米の地点から発見されているからストゥーバの建設当時埋められていたものであろう、そのコインの表面は輪郭がはっきりしない頭部と裏面には火の祭壇と思われるササンスタイルのものであり他は表面が粗末な人間の姿と裏に点のついた四角が彫られている。これは疑いもなく四世紀後期から五世紀にかけてのものであるから、建設の時代が推定される。

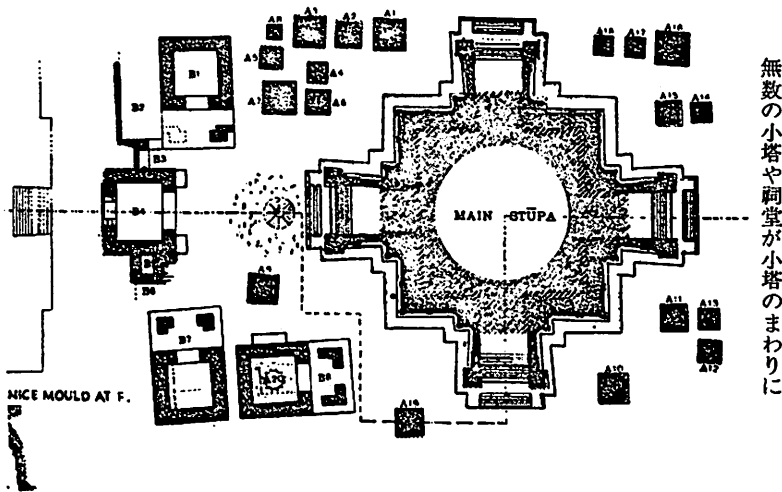
(四) 奉 献 塔

メインストゥーバのまわりには四角のベースをもつ十九の小ストゥーバの跡がある。又チャベル、かつて仏像や尊像を祀ったであろう祠堂がある。

この小ストゥーバも四・五世紀の石積みの特徴や構造をもっている。これをもっとはっきりさせるものには、その二の小塔の中からシャープル (Sharpur) 二世 (AD 三〇九〜三〇七九) のコインが発見されている。

そしてそれらの基礎は四角で、作りも構造も素材もほぼメインストゥーバと同じだから、主塔と余り時間の差もな

奉獻塔の位置図



無数の小塔や祠堂が小塔のまわりに

く作られたことであろう。

マーシャルの「タキシラ」によると、小ストゥーバAの5から小さな土器作りの壺が出土した。中には貝と黒のアゲイトのビーズ。紅玉髓の指輪。サンゴのかげらと共に VARAHRAN
 ▶ (AD三八八—九九) の銅貨が入っていた。このコインは表面は右に王の胸像、彼の王冠は背後に羽根をもった三日月や球(天体)でかざられている。裏面は火の祭壇、左右に槍をもった従者が彫られている。

又小ストゥーバ15からは七片の骨、三つのビーズ、青いガラス、アゲイト、サンゴ、又三つの真珠をもつ金の耳かざり、又一六〇ケの銅貨を入れたこわれたジャーが発見された。従って前述の出土のコインからこの小塔もメインストゥーバの建設からそう時間がたっていないことが分る。

(イ) ストゥーバ・コート(塔のまわりの広場)

ここで非常に特徴的なのはこの STUPA-COURT がテラコッタのタイルで敷きつめられていたことである。このタイルの

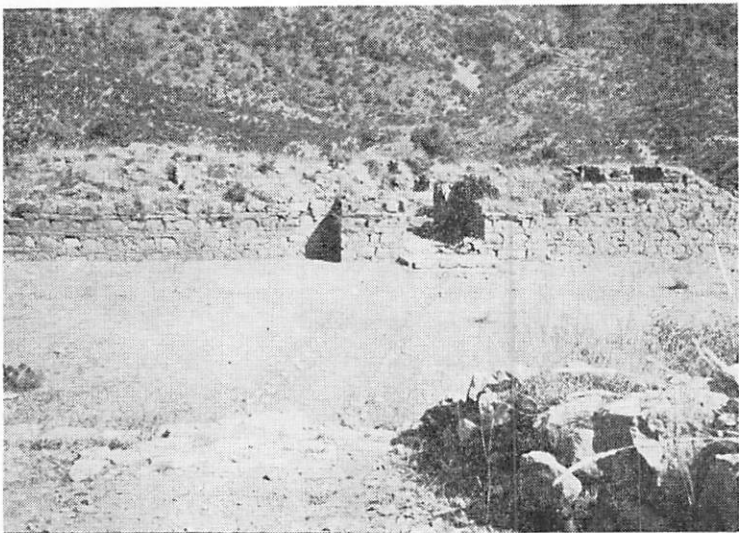
大きさは三十センチ×二十センチ、厚さ五センチの LIME
プラスチックで上塗りされていた。又メインストウパーの西の
階段前では輪法の形が作られていた。

特に興味あることは祠堂Bの5の前には、いろいろの模様
の美しいタイルが敷き詰められていたことである。或は蓮華
模様、卍模様、同心円あり、パイパルの葉の四葉飾りあり、
又十字、螺旋形の二重方等等、いろいろの模様が美しい。そ
の技巧からみて当時の文化の高さに今更のように驚かされる。

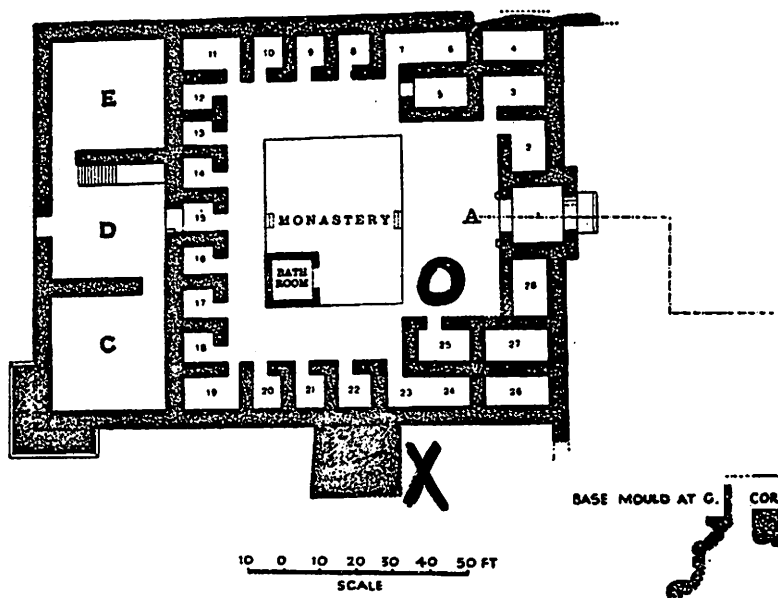
(二) モナストリー (僧院)

僧院は塔の東にあり塔の地盤より二米低く、九段の階段で
導かれている。他の僧院の如く内側にぐるりと小部屋をもつ
矩形で、東側に小部屋の列をもち、西に集会所・台所・そし
て休憩室をもつ。そこには二つの注目さるべき特徴があった。
これは東側のベランダが普通より異常に広いことである。

即ちこの広いのはこの東側の両コーナーに(九十八頁○印)
特別の小部屋が二重に作られていた位だからである。これは



今はこわれたモナストリー



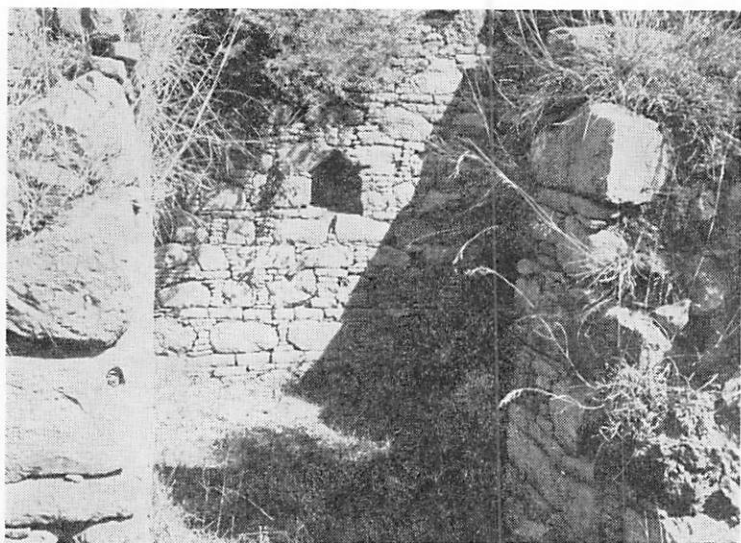
他のモナストリーでは見られないことである。もう一つの例外的な特徴は二階に登る階段がキッチンD(台所)に作られていることである。

普通は僧院の一部屋が階段となっているが。然し私はこの二階に住む僧が僧院の広場からキッチンを通らねばならないから、非常に不便であったろうと余計なことを心配したりした。

この僧院の作りは塔と同じく後期の Sewi ashlar masonry だから同時期と見ていい。これは塔が先か、僧院が先かの問題につながる重大問題なのである。

内部はクレイのプラスターでぬられていた。内仏を祀ったであろう壁にほられた小龕は未だ残っている。然し窓は安全の為に必ず高く屋根に近い方に作ってあったと思われる。これは後述のことと考え合せて考える必要があろう。

最も私の興味をもつのは北壁の中央の外側に巨大な副柱(支え柱)がある。(上図×参証)これは壁を補強す



各部屋の内仏を祀った龕

るだけでなく、多分警備の塔の基礎であろう。(ダルマラージカ僧院の北壁にそれらしいものがある) 然もその副柱は僧院の主構造と同じ作りをなしているから、主構造と同じか、余り時間的にへだたっていない時期に作られたものと思われる。だから私は建設当初かそれに間近い時から、この寺の防衛という非常手段が、配慮されていたということを考える。逆に又当時の状況がこれからのいぼれると思う。

更にマーシャルによればモナストリーの広場や小部屋に焼けたネン土や多くの燃えかすが出土し、特に粘土が陶器化していることから相当の火で焼かれたことが分るといっている。然し問題なのは、焼けた粘土の堆積は小部屋では屋根のものとの分るが、屋根のない僧院の広場に三乃至四センチの焼けた土があるのはどういう訳であろうか。これはこのモナストリーの広場が使われている時、石をひきつめたものでは夏熱の照り返しで暑く、冬は非常なつめたさを防ぐために土を盛ったのだと考えられる。この上で相当の火力の火を燃した為表面が陶器化したのである。然しこれは小部屋では柱や床

や屋根に十分の木材が使われていたから焼けても不自然ではないが天井のないこの広場。これは他から材木を集めて燃さなければ土が焼ける位になるわけではない。即ち自然の火災ではなく、意識的に焼いたことが分る。

又何も燃えるものがないストゥーバのまわりに於ても状況は同じである。特に石ダタミがいたんでいる程の跡は、白フンが木材を僧院やまわりの建物からとって来て大畚に積み上げて焼いたことが分り、この寺の消滅のさまが読みとられるのである。

(六)

さてここから出土したコインを考へて見るに(1)金貨一ヶ後期クシヤンの王子 BACHARANA の時代のものが出土している。

(2)銅貨にヴァスデーバ時代のもの五ヶ

後期クシヤンのもの

後朝インドササン時付のもの等々

クシヤン後期のものがほとんど出土しているからこの寺の創建は新しいことが分る。然し特に重要なのは(3)銀貨が白フン時代のものが二十一ヶ出土していることである。

これらには草書体のギリシヤ文字で王の名が書いてあるが、大分品質がおち退化していることから、ギリシヤ文化隆盛時代から大分時代が下っていることが分るし、又統治者の名前がグブタブラミーの特徴をもっている。このブラミー系統の文字や言葉は北西インドでは白フンが建設されるまではほとんど使用されていないからこの貨幣ひいて

この寺の上限が分る。

又凶像等から見てこれらのコインは VARAHRĀN 五世の如き一見早期ササン発行のものに似ているが非常に独自性をもったもので、表面の頭は高い円錐形で後頭部が平らで、傑出した高い鼻等の白フンの特徴をもっているから白フンの鑄造と考えられる。なお、ガンダーラへ AD 五二〇年頃行った法顯はその法顯伝に「白フンが二世紀の間この国を支配していた」といつているから、これらのコインは五世紀の後期に作られたものとマーシャルは考えている。

然も白フンのコインがこの寺から出土したことは白フンが来てすぐこわされたのでなく、相当期間こわされなかったことを示している。即ち白フンのコインが造られるのはその政権が確立したことを示し、又これが寺に奉納されたのは、奉納のされた時点では白フンの統治下にこの寺が維持されていたことを示しているからである。マーシャルはこれらコインを五世紀の後年までのものとして、タキシラの破壊は五世紀の最後の 1/4 年代と推定しているから当然白フンの時代であり、バマラの破壊はこの最後の事件であったと思われる。この寺が前述の如く自然的破壊でなく人為的な凄惨なこわし方から見て、蓮華面経などに残されたミヒラグラの破仏を思わせるものがあるのである。



これらから考え合せて見ると、このバマラの僧院やストゥーパ群はその石積みから見てほとんど同時か余り時間のへだたりのない頃建設され、百年をこえないはかない短い生命をもって、五世紀の後半の最後の最後まで残ったが遂にはろぼされて行ったと考えられる。

町の塔や僧院が片端から消されて行くこのきびしい現状から逃れ、少しでも仏法を生き永らえさせ後世に伝えようとしてこの山奥にたてこもった。

然もこのように人里はなれた山奥に寺を建てたことは仏教の形態の変化を意味する。即ち初期の仏教では毎日の食は托鉢して食を求めるのが常道であったが、この山奥に寺を建てられるようになる和白フンという非常事態はとにかく、或るスポンサーによって寺が維持されるという方向にその形態に変化が来たことが考えられる。この点からもこの四五世紀は転換期とも言えよう。

然もこのように町から廿キロもはなれた山域のような険しい、然も外敵来らば一見して見付けられる三方川にかこまれた岡の上に、又僧院の中にも前述の如く僧院の小部屋の高い窓や物見の塔の跡に、常に外敵を意識し、万一敵近づけば後方の山をこえ、カシミール方面へ逃るようにと。まさに現在の想像を絶するきびしい社会的環境であったことが想像される。然も再三述べた如く地の利から最後の最後まで残った。それは前述のこの白フンのコインの出土から白フン時代相当の間まで生きのびていたことが推測される。

然し一方この最後まで残ったということは、幸か不幸か。



かつて盛んであった造塔も今は↓法滅の実感

連日、今日つぶされるか、明日攻撃されるかの危機観は、相当のものであったろう。然も町のダルマラージカ、ジャウリアン、モラモラドウの美しい寺々、さして広くないこの町全体が美しい仏像をもつ仏塔や僧院でみちみちていたこのタキシラが、そして又速くガンダーラの町が又寺が一つ一つと壊滅せられて行く。寺は焼かれ、僧は殺され、信徒は追放される。このきびしい現実。このさまを最後まで見ききして自らの終末をじつとまつこのバマラの僧院を思うとき、この住人の心境は如何であつたらうか。まさに「法滅の意識」をひしひしと感じたことであろう。以前仏教が盛んであればある程その崩壊の悲哀は切実であつたらう。大集経のいう「末法」来るといふ意識はこんな所から起つて行つたのではなからうか。その思想としての形成はともかく、実感としての末法意識の基盤は、私はこのバマラの塔のおかれたその状況とびつたりであつたのではなからうかと思う。

否ガンダーラ、タキシラが皆多かれ少なかれこのような状況下におかれて行つたのである。故に私は「末法意識」の醸成の基盤をこういうところに見たいのである。(その外シルクロードの通商の衰滅という数々の問題も遠因としてあげられるのであるが)

とにかく、人間が常に自らを省みて、前の世を善として今日を悪とする人間の「永遠末法性」がこんな悲惨な環境に目ざめて「末法」の意識を自覚し、そしてその表現たる末法相応の經典が編纂されて行くのであると思う。

私は今このバマラの塔に立って大乘教典のもつ宗教性、実存性の根元をここに見るような気がする。

(一九七四、一〇、一五日)